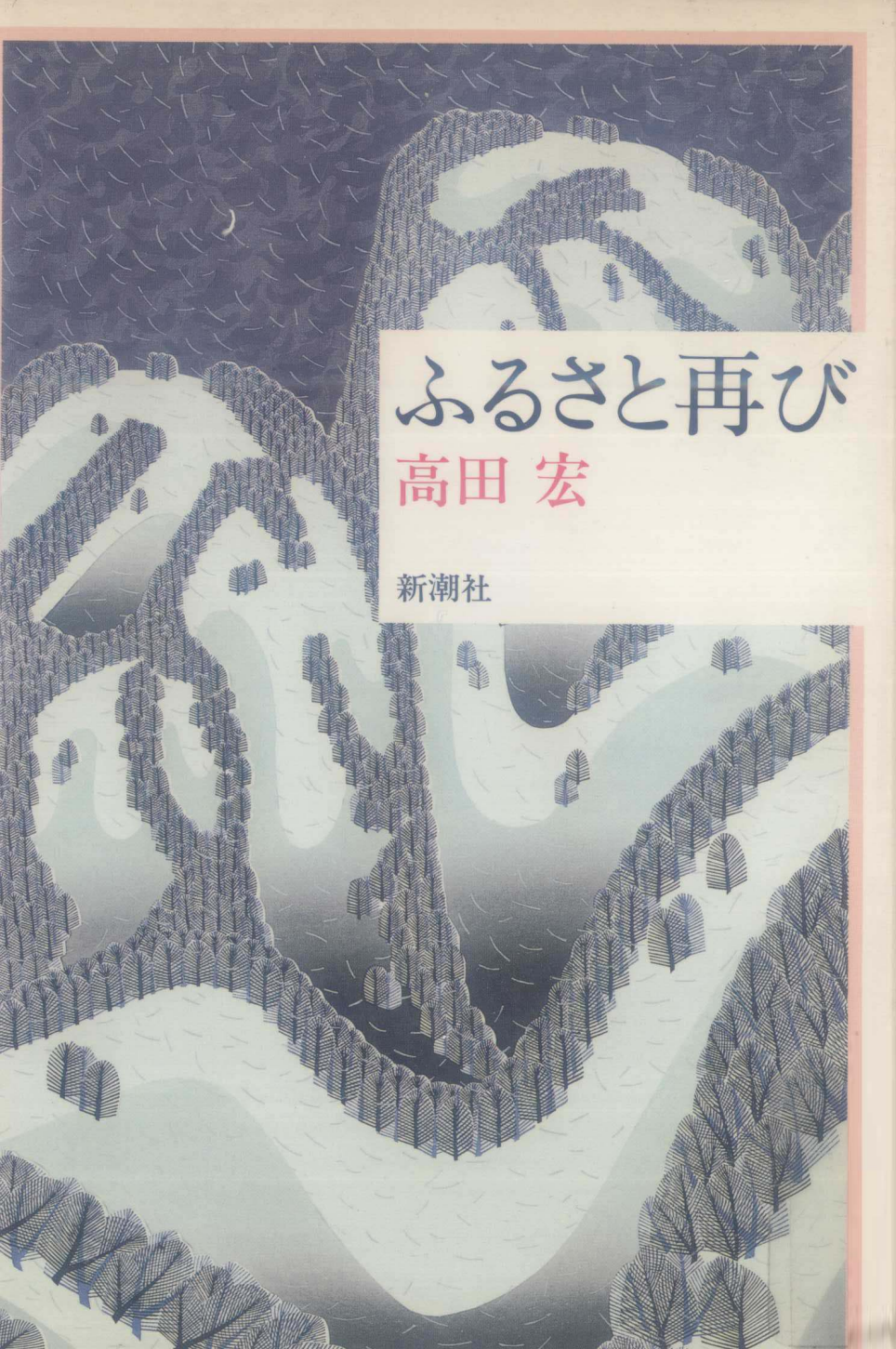




ふるさと再び

高田 宏

新潮社

ふるさと再び

高田 宏

新潮社

ふるさと再び^{ふたたび}

一九九〇年一月一〇日 印刷

一九九〇年一月一五日 発行

著者 高田^{なかだ} 宏^{ひろし}



発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
業務部〇三(二六六)五一二・編集部〇三(二六六)五四一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Hiroshi Takada 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN-10-329708-2 C0093

一、三五〇円
（本体一、三二二円）

価格はカバーに表示してあります。

ふるさと再び・目次

ふるさとの町の名へ——序にかえて——

9

田舎町の戦後

13

大地震の日

15

進駐軍の来た日

26

山の木の葉を食べた日

36

男女共学になった日

47

雪が美しかった日

58

ふるさとの消えた日

68

逆流する時間

79

ゆゆしい時間

81

雪まつり

84

[illegible]

眠り癖	136
美少女	140
夏祭りの女たち	145
松のこと	150
草の花はなでしこ	158
木の学校	162
志賀高原にて	167
タゴールの「子供」	171
断食と自由について	176
夢	180
ファンレター	184
貧乏下駄	189
超満員の夜汽車	193
道ばたの仏さま	197

土地ごとの顔

201

加賀の冬

203

真宗風土に育つ

210

能登の海の健康な日々

216

消えてしまう村で

222

北海道のふるさとへ

225

阿波藍紀行

236

ブナの森のやすらぎ

247

南の海のホテルテイー

259

帰郷者の目

——あとかきにかえて——

265

装画・牧野宗則

ふるさと再び

ふるさとの町の名へ——序にかえて——

石川県江沼郡大聖寺町。

あなたの名前がなくなつて、加賀市というおかしな名前に変わつてから、もう三十年ばかりになります。念のために今、年表を辿つてみましたら、昭和三十三年が市制施行の年でしたから、正確には二十九年経ちました。

私が育つた、というより育てられた町の名が消えて、この二十九年、私はずっと不安定な気持ちです。私のふるさとは、あなた、大聖寺町です。加賀市ではありません。私はふるさとの町を離れて暮らしておりますが、私のふるさとはあなた、口に出して言うならダイショウジであつて、カガシではないのです。私は十八歳であなたの下を離れましたけれども、数年後にあなた自身がいなくなると思ひもありませんでした。そのときはもう京都の大学を卒業して東京で働いていたのですが、大聖寺町が消えたときから私は二重の意味で故郷喪失者になつてしまつたのです。

このごろ私はふるさとのことをよく書きます。つい先だって、大聖寺藩が江戸初期、いまか

ら三百年ばかり前に生みだした古九谷について一つの物語を書いたばかりです。古九谷のうちの或るものはゴッホやピカソに負けないと思っています。そんなものを創り出したふるさとの昔に、私はもぐりこんでいたのですが、それも、なくなつたふるさとをもう一度つかみたいということだったかもしれません。故郷喪失状態のままではやりきれないのです。

それでも私の場合はまだましなのか、とも思います。大聖寺町というあなたの名前は二十九年前に消えましたが、私の住んでいたところはいま加賀市大聖寺八間道はちけんみちという地名で、なんとか「大聖寺」が、そして「八間道」も生き残っています。完全消去されて加賀市大手一丁目なんていうのにならなかったのは、せめてものことでした。

なんでも徳山市では、あの町も毛利藩の支藩の城下町だったのですが、今では町の名をほとんど新しくしてしまつて、それがあろうことか、銀座、千代田町、有楽町といった類いの町名だそうです。東京の町名の借りものです。新宿通、代々木通があつて、原宿町があるそうです。埋立地は晴海町というそうです。私のふるさとがもしも加賀市原宿町なんてことになっていたら、私は恥ずかしくてふるさとへ手紙を書けなくなつてしまします。

紀州の熊野川は今では新宮川だと聞きます。ふるさとの大聖寺川が加賀川にならなくてよかつたと思います。

土地の名前は、ひよいひよい変えてはならないものです。私にとつては大聖寺が、大聖寺だけが私の成長をかかえこんでいてくれた土地です。あなたの名が、ただなつかしいのではありません。名があるから、あなたなのです。ミシェル・ピュートルが、「ある特別ないくつかの場所は、

歴史のなかのある根源的な瞬間——それより漠然として曖昧な時代のなかにおいて見ると、くつきりと浮かびあがる根源的な瞬間を語り、そのことで漠然として曖昧な時代を照らしだすような言葉を、われわれの時代にまで運んでくれるのです」(清水徹訳)と書いていますが、私にとつてあなたは、そういう場所なのです。芭蕉の『おくのほそ道』は歌枕という聖なる土地をめぐるものでした。土地の名が消えていては旅が意味を失います。私はいま大都会の漠然曖昧のなかにおいて、消えてしまったあなたを求め、しかしもう昔の時間のなかでしかあなたに会えない。それがもどかしく、ときに心萎^なえるのです。

田舎町の戦後

